

[論文]

教師のカリキュラム・デザイン力を高める要件

市川 洋子

Order to Enhance the Teacher's Ability to Design the Curriculum

Yoko ICHIKAWA

A purpose and the contents of the education strongly receive influence from the society.

In late years a social change is intense, and contents of the education to be required increase steadily. Teacher have to understand the national standard and organize the curriculum flexibly to teach more educational contents in a limited time frame. For that reason, autonomy and creativity are necessary for the teacher. The purpose of this study is to show the important matters enhance the teacher's ability to design the curriculum.

1. はじめに

平成 29 年に学習指導要領が改訂された。今回の改訂は非常に大きな改革で、それまでの「教師が何を教えるか」から「子どもが何を学ぶか」に

重点が移された。学習指導要領は、1947（昭和22）年に〔試案〕として示されて以来、社会の変化に応じてほぼ10年ごとに改訂されてきた。かつては、経験主義的な教育を基盤としたいわゆる戦後の新教育が展開された。しかし、学力が低下するとの批判を受け、学習指導要領が教育課程の基準としての公的性格を強め、各教科の系統性を重視したものへと変わっていき、1968（昭和43）年の改訂で、教育内容・授業時間ともにピークを迎えた。それが子どもの管理や詰め込み教育、落ちこぼれといった現象を生み出し、学習指導要領は「ゆとりと充実」路線に向かっていった。1998（平成10）年の改訂では、総合的な学習の時間が新たに導入され、カリキュラム論の視点で言えば大きな改革となるはずであった。しかしながら、教育課程が実施される前から学力低下論争が吹き荒れ、ゆとり路線からの変更を余儀なくされた。

このように、教育の方向性は社会の要請に応じて文字通り右往左往していった。今回の学習指導要領改訂もまた社会の変化の影響を受けているが、かつてのような経験主義か教科主義かの二者択一ではない。それは、社会の変革の速度があまりにも速く、Technical SingularityやSociety5.0で言われているような予測困難な社会が到来しようとしているからだ。

この社会変化に伴って、今後求められる教育内容は増える一方である。今回の改訂でも、小学校高学年における外国語科、プログラミング教育が新たに加わった。授業時間枠は大きく変えられない。今後も内容が増えることはあっても減ることはないだろうから、いずれ制度破綻を起こしてもおかしくない。しかも、ICT教育の充実、いじめや不登校対応、インクルーシブ教育など、様々な教育課題が山積していく。決められた時間枠の中でこれらの問題を解決するためには、学習指導要領を十分に理解し、柔軟に教育課程を編成し実践していく教師の自律性、創造力、発想力が必要である。また、教員や教職を目指す学生は、どちらも画一的な一斉授業を受けてきた。受けた教育に強い影響を受けるため、測定できる学力観や教師主導型の教育といった殻を破る必要がある。

そこで、本研究では、カナダ・アメリカの学校視察（2019年11月）を通

して得た知見をもとに、教師のカリキュラム・デザイン力を高めるにはどうしたらよいかを考察していく。

2. Taradale School（カナダ・アルバータ州）の事例

（１） 学校の概要

カルガリー（カナダ・アルバータ州）にある Taradale School（K-G4）は、2007年に開校した公立小学校である。児童数680人、教職員数36人の大規模校である。カルガリーは石油関連産業で発展し、比較的裕福な家庭が多い。その中であって、この学校は移民の子どもが多く通い、必ずしも裕福な家庭の子ばかりではない。しかし、学業成績は決して悪くないとのことだった。

（２） 異学年混合学級編成（Combined Grades）

Taradale School は、1・2年生、3・4年生がそれぞれ2学年混合の学級編成を採用している。異学年混合学級を採用する理由は、ホームページに以下のように記載されていた（訳は筆者）^①。

- ・異学年混合学級の生徒の学力は、一貫して改善し続ける。
- ・生徒と教師は2年間一緒なので、教師は生徒を深く理解し、教師と生徒の深い関係性を生む。
- ・異学年混合学級における生徒同士の肯定的な関係が育まれている。
- ・年上の生徒は、年下の生徒の面倒をみることによって理解の概念（concept or understanding）を深める。
- ・年上の生徒がリーダーシップや（上級生としての）責任を学ぶことを通して、社会性や感情を高めていき、年下の生徒は安心感をもつ。

異学年混合学級は、自尊心を高め、学習者として自分のことを肯定的にみるようになることが研究で明らかになっている。異学年混合学級が、生徒の学力や社会的な成長を促進する。学習が活性化する条件を生み出すことができる教育方法のひとつである。

日本のように、1クラスの児童生徒数という物理的条件から複式学級にするのではなく、異学年集団の教育的効果を意図し、教育方法のひとつとして異学年混合（Combined Grades）の学級編成を採用していることがわかる。

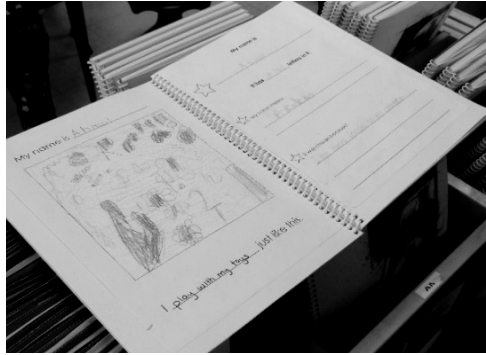
（３） 探究学習

Taradale School は、カリキュラムの中に積極的に探究学習を取り入れている。探究学習とは、1960年代に始まった発見学習を源流とし、特に科学教育の中で発展していった。「自然や物質の世界を探究するプロセスを伴った学びのアプローチであり、問いから始まり、発見し、その発見を検証し、新たな理解をもたらす。科学教育に関する探究は、可能な限り実際の科学を反映したものでなければならない。探究のプロセスは、自身の好奇心や疑問に思ったこと、興味、情熱によって行われ、観察を理解したり、問題を解決したりする」⁽²⁾ 学習のことである。日本においては、探究的な学習とは、[課題の設定]—[情報の収集]—[整理・分析]—[まとめ・表現]といったフェーズをとる問題解決活動が発展的に繰り返される一連の学習活動⁽³⁾と捉えている。

参観した授業は理科で、身近にある材料を使って「沈んだものを浮かせよう、浮いたものを沈めよう」という課題解決の場面であった。広い教室に低学年の2クラスが集まり、4人グループになって実験を行っていた。

教科書はなく、教師が児童の実態に合わせて教材を選択・作成し、子どもたちのノートが教科書になっていく。領域ごとの分冊になっており、教師の板書を単に写したのではなく（そもそも、教師は板書をしない）、ワークシートに学んだことを書き入れたり、自分なりに表現したものになって

写真 1 児童のノート



いる（写真1）。

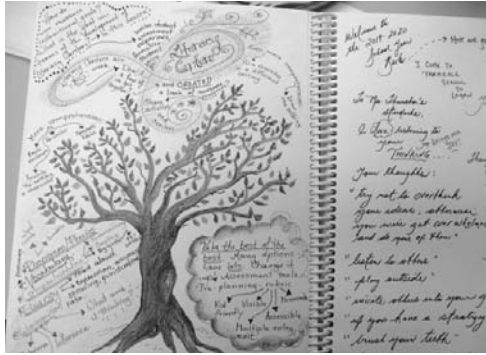
算数は、概念を系統的に学んでいくことが必要な教科である。算数についてどのように指導をしているのかと聞いたところ、単元に合わせて多様な方法を取り入れているということだった。「2クラス合同で、2人の教師が1年生と2年生を別々に指導する」、「2クラス合同で、全体を4人の小グループにし、2人の教師が回っていく（今回参観した理科授業もこのような方法で展開していた）」、「2クラス合同で1つのプロジェクトを行う」といった具合である。

（4）カリキュラム・教育デザイン力の高い教師

ここだけでなく訪問した他の学校でも、教師のカリキュラムを創造し、実践する力量の高さに驚かされた。教育効果を意図して異学年混合学級編成を選択し、実践する。教科・単元や学習内容に応じて、教材を創り、教材を選択し、教育方法や評価方法を考え、PDCAサイクルで改善を続けていく。まさに、プロフェッショナルとしての教師である。力量の高い教師が育っているのは、何に起因するのだろうか。

アルバータ州の学校は、教員の人事や枠内の予算執行に裁量権が与えられている。教員の募集は公募により、校長などの管理職が面接して採用を決めるので、各学校は、教育方針に賛同し柔軟に対応できる意欲ある教員

写真 2 Visual Journal



を集めることができる。日本の公立学校教員のような定期異動もなく、管理職は優秀な教員を慰留することができる。また、アルバータ州には、州のスタンダードが存在するが、教材の決定や教育方法は教員の裁量に任されているので、Taradale Schoolの教員は、学校のエデュケーションを具体化し、目の前子どもたちが学べる最適の環境を創造することができる。

写真2は、各教員がTaradale Schoolの教育方針をどう理解し、教育活動にどう生かしてきたかを振り返って作成した“Visual Journal”である。日本でいう学級経営案の振り返り版のようなものである。日本の場合、学級経営案は公文書であり、各担任が限られたスペースに文字を埋め込んでいく。Taradale Schoolの“Visual Journal”は、教員一人一人が独自に表現しているものだった。新卒教員のそれは、まだ内容的に浅いものであったり、コピーしたものにマーカーしただけのものだったりするが、「いずれ変わっていくので、それを待っている」と校長が語ってくれた。管理職が教師の成長を信じ、教師一人一人が自律し、自律した教師集団がよりよい学校教育を推進していく。このプラスのスパイラルを生み出す原動力は、管理職のリーダーシップにあると考える。

(5) Galileo Educational Network によるスクールリーダー養成

この管理職を対象としたスクールリーダー養成を行っているのは

Galileo Educational Network である。教員が探究学習を実施していくには、サポートが必要だろうということで、Dr. Friesen（カルガリー大学教授）と彼女の大学の教員仲間3人で、民間からの寄付で始めた。当初、CBE（カルガリー教育委員会）とは関係なく、カルガリーの郊外で、試験的にNPOとして始めた。現在は、CBEと協力しながら様々な研修プログラムを提供している。そのひとつである“learning leader”プログラムは、教頭になる前の教員が受講し、リーダーシップや探究学習を効果的に推進していく能力を身に付けることを目的としている。研究所では、このプログラムを受講した管理職の変容が子どもたちにどのような影響を与えたか、追跡調査を行っている。その結果、教員が変わり、子どもたちが変わることがわかってきたという。ここ4年間で、このプログラムを学んで管理職になった教員が毎年600～800人おり、Galileoが提唱する教育が徐々に広がっていると語ってくれた。

3. Minnesota New Country School の事例

（1） Minnesota New Country School の概要

Minnesota New Country School（以下、MNCS）は、中高一貫のチャータースクール⁽⁴⁾である。中等教育の現状に疑問を抱いた公立高校の教師や地域住民が、中等教育の在り方を改善するために、1994年に開校した。

当時のアメリカの公立高校は、様々な問題を抱えていた。「危機に立つ国家」（1983）には、アメリカの生徒の学力低下や教師の質の低さが報告されている⁽⁵⁾。その後の教育改革にもかかわらず改善がみられていない。青年期の特徴として、うつ病、不安、摂食障害のような心理的な障害が発生したり、薬物依存症、犯罪といったハイリスクの行動が増加したりする。これらの精神的問題や問題行動は、知的成長や情緒的成熟を妨げ、成年期への健全な移行を妨げてしまう。また、青年期の経験は、雇用機会や社会における人間関係にも強い影響を与えてしまう。Eccles & Midgley

(1989) は、思春期のニーズと発達的な文脈の間に起こるミスマッチが、中退や情緒的な問題といった否定的な結果の原因となりうるとして、“Stage-Environment Fit Theory” を提唱した⁽⁶⁾。そして、青年期の重要な発達のニーズを自己決定理論に求め、「自律性への認識」「関係性への認識」「コンピテンシーへの認識」としている。MNCSでは、この発達のニーズに応えるカリキュラムを開発・実践している。

MNCS のカリキュラム（エンドビジョンモデル）の開発者たちは、この“Stage-Environment Fit Theory” を踏まえて、Project Based Learning（以下 PBL）を核としたエンドビジョンモデルを開発した。主な特徴は4つである。

① アドバイザリー・グループと民主的な文化の醸成

7年生（中学1年）から12年生（高校4年）までの異年齢の生徒17人が1つのアドバイザリー・グループ（学級）を形成し、1人のアドバイザー（教師）が入学から卒業まで担当する。いわゆるマルチエイジ・クラスである。写真3は、1つのアドバイザリー・グループ（日本でいう学級）の空間である。奥の低い間仕切り（図書架を兼ねている）の向こう側に別のグループの空間が広がる。

アドバイザリー・グループとは、組織をより効果的に運営するための知識やスキルをもった個人の集合体のことで、一般的に「顧問団」「諮問グループ」と訳されている。アドバイザリー・グループのリーダーは、命令

写真3 アドバイザリー・グループの空間



に従わせる権威者というよりも、推奨したり、情報や材料を提供したりする。公共意識の低下や多様な価値観の増加といった、世界規模の急激な変化に伴って、組織をどう運営していくかが非常に複雑になり、アドバイザー・グループの存在が重要になってきている⁽⁷⁾。

PBLを核とするエンドビジョンモデルは、このような社会の状況を教育の場に取り入れ、PBLを通して生徒たちが学ぶ環境として、このアドバイザー・グループを導入したのである。このアドバイザー・グループのリーダーが、MNCSの教師である。換言すれば、MNCSでは、教師は権威者ではなく、生徒が行うプロジェクトの質を高めるために、アドバイスしたり情報や材料を提供したりする同行者である。

また、民主的な文化を醸成するため、学校生活のすべてを決定する議決機関である生徒議会が存在する。生徒間で問題が起きた場合、修復的判断／サークルプロセス (restorative justice/circle process)⁽⁸⁾ に基づいて解決が図られている。修復的判断とは、問題を起こした生徒を罰するのではなく、どうすれば関係を修復できるかを考えさせることを目的とする。問題を起こした当事者に第三者（ピアサポートの訓練を受けた生徒）が加わって話し合いが進められ、最終的には当事者同士で解決を図っていく。この話し合いで行われるのが、サークルプロセス⁽⁹⁾ という手法である。

② 自律的な PBL

生徒は、1つのプロジェクトに100時間かけ、年間10プロジェクトを行っている。数学だけはプロジェクトで行わず、数学学習アプリを活用した個別学習となっているが、他の教科はすべてプロジェクトによる。ミネソタ州は、日本と同様、学習指導要領にあたる“Profile of Learning”⁽¹⁰⁾（高校卒業の履修要件で、日本の学習指導要領にあたる。ミネソタ州独自のものである）があり、すべてを履修することが卒業の要件となっている。数学以外の教科すべてをプロジェクトとして行って卒業要件を満たすとはいったいどういうことなのだろうか。

MNCSで実践するPBLは、生徒が自分の興味・関心に基づいてテーマを決定し、プロジェクトを完成させるためにどのようなことを学ばなけ

ればならないかをリストにする。リストアップされた内容が“Profile of Learning”のどの部分を履修することになるのかを考えていく。プロジェクトが終了して単位が認められると、履修状況が生徒のポートフォリオに記録される（図1）。生徒は、卒業までにすべての項目を履修できるようにプロジェクトを企画していく。

なお、ミネソタ州の“Profile of Learning”（2003-2004）は、日本の学習指導要領に比べるとかなり大綱的である。「読む、調べる、聞く」「書く、話す」「教養と芸術」「数学」「探究」「科学」「人と社会」「自己決定」「情報処理」「生涯学習活動」からなり、25ページのボリュームである（日本の高等学校学習指導要領は650ページ）。例えば、理科は「生物概論」「化学概論」「地球と宇宙」「物理の法則」「環境」の6科目のうち2科目選択することに


図1 Personal Learning Plan（2002年度版）

Minnesota New Country School
 Transcript of Projects
 210 Main Street
 Henderson, MN 56044
 (507)248-3353

Transcript for:

Credits Needed to Graduate: 60
Validated MNCS Credits 33.4
 Credits needed to be on Schedule: 38.0
 Current Credits: 36.425
 Total Proposed Credits: 35.55
 Credit Based Grade: 10
 Age Based Grade: 10

Proposed Graduation Date: May 22, 2004
 Date of Report: May 9, 2002
 Date of Birth: November 7, 1985



Advisor: Anthony Sonnek

Project Title	Date Proposed	Percent Complete	Current Credits	Validated Credits	Grade	Completion Date	Profiles	
1 History of Football		1	100%	1	1	A	10/98	INF, W, AI
2 History of the Green Bay Packers	0.75	100%	0.75	0.75	A	2/3/99	History, Tech App	
3 General Math	1	100%	1	1	B	7/19/99	HMAS, CADM	
4 Journals 98-99	1	100%	1	0.5	A	7/1/99	Writing	
5 Astronomy	1	100%	1	1	B	5/19/99	Earth Systems	
6 Bicycle Safety and Maintenance	0.75	100%	0.75	0.5	B	5/21/99	Tr, Agr, AI, PHS	
7 "Don't Drink the Water", Play Project	1	100%	1	1	Pass	6/30/99	IC, AC&P, GR	
8 Wolf Ridge Environmental Center	0.25	100%	0.25	0.25	A	6/21/99	Tech Reading, Writing	
9 Wolf Ridge Environmental Center	0.25	100%	0.25	0.5	Pass	6/7/99	Electives	
10 Sign Language	0.1	100%	0.1	0.1	A	7/1/99	Tech B.L.V., World Language	
11 Construction of a Basement	2	100%	2	2	A	6/30/99	Inf, Tr, Agr, PHS, IC, SSM, GR	
12 MAX Conference	0.4	100%	0.4	0.4	A	11/10/99	AW, IC, AC&P, AMM	
13 Ossawatimbees Camping	0.25	100%	0.25	0.25	PASS	7/17/00	AW, IC, PHS, SSM	
14 Exploring Genes	1	100%	1	1.25	A	6/24/99	Inf, PHS, AW	
15 Anatomy	0.5	100%	0.5	0.5	B	10/7/99	20th Century Systems	
16 Science Activities 98	0.3	100%	0.3	0.3	B	10/7/99	Physical Systems	
17 Genetics	0.4	100%	0.4	0.4	B	10/20/99	Biology Concepts	
18 Golf	0.1	100%	0.1	0.1	PASS	11/21/00	Physical Education	
19 Algebra	1	100%	1	1	A	6/16/00	Algebraic Patterns	
20 Minnesota Trees	0.5	100%	0.5	0.5	A	12/20/99	Inf, Tr, Agr, PHS, IC, AI, Agr	
21 U.S. Currency	0.5	100%	0.5	0.5	A	3/13/00	AW, Inf, Tr, AI	
22 98-99 Lifelong Learning			0.5	0.5				
23 Miracle Worker 3/11	1.5	100%	1.5	1.5	B	6/7/00	Heritage Halls 6/29 Anthony Play 12/98	
24 First Aid Class	0.1	100%	0.1	0.1	A	12/12/99	W, Inf, NF, Tr, NS, DO, Agr, Inf	
25 Chemistry	0.5	100%	0.5	0.5	A	4/25/00	PLV, In Com, Indiv & Com Health	
26 Magic the Gathering Grant	0.6	100%	0.6	0.6	B+	6/15/00	Phys Systems	
27 Exchange Henderson	0.5	100%	0.5	0.5	A	6/14/00	Inf, W, Agr, Tr, Agr	
28 Art	0.5	100%	0.5	0.5	A	6/15/00	Tr, W, AC&P, AMM, ACC, INF	
29 North Carolina	0.75	100%	0.75	0.75	A	5/4/00	Prod, W, Agr In, Geo & Civ, Hist & Civ, Pers Res	
30 Writing Skills Project	0.5	100%	0.5	0.5	A	9/25/00	PLV, Agr	
32 Alcatraz	0.75	100%	0.75	0.75	B+	12/12/00	PLV, AW, Inf, PHS, USH	
33 Knowledge Bowl	0.25	100%	0.25	0.25		3/23/01	PLV, IC	
34 Lifelong Learning 99-00			0.61	0.61			Mayo House 5/27	
36 Martin Luther 10/26							Farm & Power 12/10/99	
37 1998 Presentation Nights: Astronomy	2/25/99						Construction of a Basement 7/1/99	
38 Outstanding Achiever: 11/19/98, 7/2/99								

※2002年にMNCSを訪問し、この学校で作成した資料を入手したものである。
 これは、ある生徒（10年生、高校2年生）のポートフォリオの一部である。卒業までに60単位必要で、この生徒は、現在36.425単位修得している。表の左欄から順に、プロジェクトのタイトル、提案単位数、達成率、現在の修得単位数、評価された単位数、成績、日付、Profilesとなっている。
 2019年現在、デジタル・ポートフォリオに記録保管されている。

なっている。「生物概論」が書かれているのはA4の大きさに1ページ分(図2)である(高等学校学習指導要領の理科は40ページ)。

③ 真正評価システムの導入

生徒は、入学すると評価規準(“Profile of Learning”およびMNCSが作成した

図2 “Profile of Learning”(2003-2004)

<p style="text-align: center;">SCIENTIFIC APPLICATIONS <u>CHOOSE TWO</u></p> <p>Concepts in Biology: A student shall:</p> <p>_____ A. demonstrate understanding of biological concepts, theories, and principles including cell theory, mechanisms of heredity, biological change over time, the interdependence of organisms, material cycles and energy flow in living systems, the behavior of organisms, and the historical significance of major scientific advances through investigation and analysis of cells, organisms and ecosystems;</p> <p>_____ B. demonstrate understanding:</p> <p>_____ 1. of how historical and current scientific concepts and knowledge guide scientific inquiries;</p> <p>_____ 2. that scientific inquiries are performed to test ideas and predictions and to learn about the natural world;</p> <p>_____ 3. of how the use of various technologies influence the quality of data and the investigation;</p> <p>_____ 4. of the essential role of mathematical tools and models and how they are essential to scientific inquiry;</p> <p>_____ 5. of how explanations based on evidence adhere to established criteria including empirical standards, logic, openness to criticism, and reporting of methods and procedures; and</p> <p>_____ 6. of how traditions govern the conduct of science, including ethics, peer review, and consensus;</p> <p>_____ C. design and conduct an experiment to investigate a question and test a hypothesis by:</p> <p>_____ 1. formulating a question and hypothesis;</p> <p>_____ 2. designing and conducting an investigation;</p> <p>_____ 3. recording relevant data;</p> <p>_____ 4. analyzing data using mathematical methods;</p> <p>_____ 5. constructing reasonable explanations to answer the question and supporting or refuting a hypothesis;</p> <p>_____ 6. identifying and considering alternative interpretations of results;</p> <p>_____ 7. specifying implications for further investigation;</p> <p>_____ D. design and conduct one investigation through a problem-based study, service learning project, or field study by identifying scientific issues based on observations and the corresponding scientific concepts; analyzing data to clarify scientific issues or define scientific questions; and comparing results to current models, personal experience, or both; and</p> <p>_____ E. use scientific evidence to defend or refute an idea in a historical or contemporary context by identifying scientific concepts found in evidence; evaluating the validity of the idea in relationship to scientific information; and analyzing the immediate and long-term impact on the individual, society, or both, in the areas of technology, economics, and the environment.</p> <p>MNCS Profiles</p> <p style="text-align: right;">Page 14</p>
--

※2003年にMNCS訪問時に入手した資料。“Profile of Learning”(2003-2004)は、生徒が入学したときにわたされる。

「プロジェクトのルーブリック」がわたされ、この2つの規準と照らし合わせながらプロジェクトを進めていく。生徒は、このプロジェクトを達成することで、どの規準を満たすかを企画書に書き入れる。そして、プロジェクト活動中は、自己選択した評価規準をもとに毎日振り返り、教師とともに形成的アセスメントが行われる。

プロジェクトが終了すると評価委員会が開かれる。生徒は、自分のアドバイザー、他のグループのアドバイザー、プロジェクトに関わった専門家という3人の大人の前で、プロジェクトで何を学んだか、評価規準をどれだけ達成できたか、自己申告した単位を取れているかを発表する。評価者は、プロジェクトが達成されたかどうかを、口頭試問を通して判断する。また、プレゼンテーション・ナイトを開催し、地域の人々や保護者からの外部評価を受ける。

4. 自律的な学びの環境を作り出す教師の カリキュラム・デザイン力

自律的な学びの環境を作り出すためには、カリキュラムをデザインしていく発想力や柔軟性、実践力、チームワーク力といった多様な能力が必要であるが、最も重要なのが教員一人一人の自律性である。Taradale School、MNCSのどちらの教員も、カリキュラム・デザイン力（カリキュラム・マネージメント力）が高く、社会の要請や専門的見地から、目の前の児童生徒をどのような学校環境に置くことが最適なのかを考え、カリキュラムをデザインしていた。Taradale Schoolの場合は、異学年混合学級編成を採用し、探究学習を導入していた。教科書はなく、児童のノートがテキストになっていた。MNCSでは、異年齢混合学級編成を採用して、教師と生徒のよりよい関係性の中で生徒による自発的なPBLが行われていた。プロジェクトの学びの質を保証するために真正評価を取り入れ、教師はアドバイザーという役割に変化していた。このように、カリキュラム改革に積極的に関与し、改善し続ける教員の自律性は、何によって育まれるのだろうか。

第1に、教師に与えられた裁量幅に依るところが大きいのではないだろうか。日本の教師の優秀さは世界でもトップと言われているが、限られた裁量の中で最大限の効果を上げることに力が注がれ、自由な発想や柔軟性が十分に発揮されているとは言えない。今回の学習指導要領改訂のポイントとしてカリキュラム・マネジメントを推進していくことが挙げられているが、カリキュラム編成における自由度からいえばまだ十分とは言えない。

第2に、PBLのような自律的な学びの環境を実現するためには、測定できる学力観や教師主導型の授業観といった殻を破る必要がある。自律的に学習を進めていくことを“drive”と表現することがある。学習者が運転手で、教師は傍らに寄り添って案内する（guide on the side）ナビゲーターである。Caine & Caine（1997）は、教師には3つの志向があると指摘する。志向1の教師は、知識を学習者に伝え、学習者が正確に知識を習得することを目的としている。志向2の教師は、指導目的を知識習得ではなく行動結果に求めるが、あくまでも教師主導の指導が前提となっている。志向3の教師は、探究に基づく教育方法を使い、学び方スキル、批判的思考、問題解決スキルなどの獲得を指導目的とする。生徒の興味・関心やニーズをもとにプロジェクトが作られ、生徒自身が設定したゴールに達成できるようにアドバイスや支援を行っていく。志向3の教師は、「志向1のような直接型の指導を捨て去ることを要求される」のである⁽¹⁾。カルガリーでは、この志向1の殻を破る役目を Galileo Educational Network が担っていた。日本における教員研修（lesson study）は大変充実しており、教育委員会と大学が協力して教員研修を進める自治体も多いが、志向3の教師としての資質・能力を深めるためのものになっているとは言い難い。教員を養成する教職課程が改訂され、2019年度から新教育課程が始まった。ようやく「総合的な学習の時間の指導法」が導入された。この科目の中で、各学校で目標を設定し、ループリックを作成し、教科等とのつながりを考えた学習活動を組み立てていくことを学ぶ。この科目が志向3の教師を育てる端緒となることを期待したい。

第3に、学習指導要領も1つの要因として挙げられる。日本は、学習指

導要領が教科分化型となっており、基本的に教科中心のカリキュラムである。したがって、PBLや探究学習といった経験主義的カリキュラムと学習指導要領は、異なるカリキュラムに位置付けられる。日本の教育課程は、学習指導要領を基準として編成されるので、PBLは理論上総合的な学習の時間にのみ対応可能となる。しかしながら、今回（平成29年告示）の学習指導要領改訂によって、教科横断的な視点からカリキュラム・マネジメントを行っていくことが推奨されるようになったことから、今後、2教科以上の教科間の相互関連を図る相関カリキュラムや特定の教科、学習者の関心、社会の問題などを中核としたコアカリキュラムなど、多様な形の学びが展開され、総合的な学習の時間と連動させた授業の開発も進んでいくと思われる。

その際に、小学校学習指導要領が教科および学年ごとに示されていることがネックとなるだろう。生活科や外国語活動など2学年まとめて示される教科が増えたが、他の教科においても、もっと学年をまたいで大綱的に示していくことが必要だと考えられる。中学校・高等学校の学習指導要領は、学年ごとではなく教科ごとに編集されているが量的に多い。そのため、PBLや探究学習と学習指導要領を、MNCSのようにつなげることが難しい。シュライヒャー OECD 教育・スキル局長が、来日した際に「PISAの最も興味深い結果は、教える量と、教育の結果の質の間に相関関係がないことです。フィンランドは日本の授業時間の約半分ですが、教育の成果は、ほぼ似ています。大切なのは教育課程の深さです」（朝日新聞平成30年3月26日刊）と述べていた。広く浅く網羅主義を貫くのか、内容を精選あるいは選択肢を増やして狭く深く学べるようにしていくか、議論の余地がありそうだ。

5. 終わりに

2つの学校の視察を通して得た知見をもとに、教師のカリキュラム・デザイン力を高めるために、「教師の裁量」「教師の志向」「学習指導要領の

構造」という3つの視点から考察した結果、①学習指導要領の改訂によって教師の裁量幅は広がったが、それでもまだ十分でないこと、②探究に基づく教育方法を使い、学び方スキル、批判的思考、問題解決スキルなどの獲得を指導目的とする「志向3」をもつ教師の育成、③学習指導要領の内容の大綱化の3点が必要であり、この3つが改善されることにより、教師はより自律性を発揮し、カリキュラム・デザイナーとしての力量を高められることが期待できる。

教育課程は、「日々の指導の中でその存在があまりにも当然のこととなっており、その意義が改めて振り返られる機会は多くないが、各学校の教育活動の中核として最も重要な役割を担うもの」⁽¹²⁾として重要である。だからこそ、教員養成の段階からカリキュラム・デザインについての考え方や創造性を育んでいかなければならない。今後、デザイナーとしての教師に必要な資質・能力を明確にしていくことが課題として残された。

〔付記〕 本研究は、科学研究費助成事業「異学年混合学級の有効性を高めるカリキュラムと教育方法に関する国際比較研究」（基盤研究(B)、研究代表者：伏木久始、2017～2020）を受けている。

（註・引用文献）

- (1) <https://school.cbe.ab.ca/school/taradale/teaching-learning/program-approach/pages/default.aspx>
- (2) Peter Dow (1999) “Why Inquiry? A Historical and Philosophical Commentary”: FOUNDATIONS: A monograph for professionals in science, mathematics, and technology education; Inquiry Thoughts, Views, and Strategies for the K-5 Classroom. National Science Foundation, Vol. 2, p. 2
- (3) 文部科学省（平成22年11月）「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（小学校編）」第1編、p. 17
- (4) チャータースクールとは、普通の公立学校を規制している官僚的なルールや多くの制限に縛られることがない代わりに、教育の結果に責任をもつ公立学校のこと。詳しくは、ジョー・ネイサン（1997）「チャータースクール——あなたも公立学校が創れる」大沼安史訳、一光社、を参照のこと。
- (5) アメリカ教育省著（2004）「アメリカの教育改革」西村和雄・戸瀬信之編訳、京都大学学術出版会
- (6) Eccles, J. & Midgley, C. (1989) *Stage-Environment Fit: Developmentally Appropriate Classroom for Young Adolescents*; Research on Motivation in Education, Vol. 3, pp.

- (7) <https://managementhelp.org/boards/advisory-boards.htm>
- (8) ハワード・ゼア「責任と癒し——修復的正義の実践ガイド」森田ゆり訳、築地書館、2008、p. 50
 この著書によれば、修復的正義とは、「侵された罪悪を可能な限り正し、癒すために、その罪悪による損害、ニーズ、果たすべき責任をすべての関係者がともに認識し、語る協力的な手続き」のことである。対義語は「応報的正義」であり、「ゼロ・トレランス」という形で教育に適用されている。
- (9) Newell, R. J., & Ryzin, M. V. (2009). *Assessing What Really Matters in Schools; Creating Hope for the Future*. A Division of Rowman & Littlefield Publishers, p. 64
 トーキング・サークルとは、アメリカの原住民が行ってきた伝統的なコミュニケーション方法で、参加者が円座し、順番に発言していく。
- (10) ミネソタ州では、州の履修基準の開発が始まったのは1993年で、公示されたのは1998年である。2003年に改訂された。
- (11) Caine, Geoffrey & Caine, Renate N. (2006). *Meaningful learning and the executive functions of the brain*. New Directions for Adult and Continuing Education, pp. 53-61
- (12) 文部科学省（平成29年7月）「小学校学習指導要領解説総則編」、p. 11